

第1回企画分科会（4/23）における主な意見

（医療・福祉）

- ・介護というのは感染症とは縁が切れない分野ではあるが、一番大きな問題は人材不足。もう一つの問題はネットワーク（医療・福祉・行政）をどのように築き上げていくか。これが非常に重要になってくる。
【石原委員】
- ・地域バランスを考えて医療計画を見直すべき。【上手委員】
- ・（オンライン化など）「新しい介護の在り方」を探っていけるようになった。
【石原委員】
- ・（オンラインで）子育て相談に対応する保健師の数が足りていない。オンラインでは伝えられない、伝わらないことがある。【安田委員】
- ・全国障害者芸術・文化祭を契機に、障がい者の芸術文化を全国に発信いただくとともに、障がい者の社会参加につなげていただきたい。
【岡本委員】

（教育）

- ・音楽や英語など大きな声を出すことが抑えられているため、ソーシャル・エモーショナルスキルへの発達にかなり影響を与えることを危惧している。【松川委員】
- ・対面を否定するわけではないが、リモートに重点を置いた方がより成績が上がるという面もある。【森脇分科会長】
- ・自然とのふれあいや、文化・芸術を取り入れながら、情緒面での発散の機会やクリエイティブなスキルを伸ばしていく面を併せてやっていくことが必要。【松川委員】
- ・大学教育のオンライン化が大学進学動向も影響し、地方の大学は学生確保に苦慮する。地方に魅力ある大学をどう創造するのが重要。
【松川委員】

(経済・観光)

- ・若者の就業について、うまくマッチングができていない、あるいは志望に対して適切な紹介ができていないのではないか。【林委員】
- ・コロナ禍で、「サステイナブルツーリズムの確立」が、非常に求められるようになってきた。【岸野委員】
- ・「岐阜県で働き続けたい、住み続けたい」と思われることが大切【高田委員】
- ・大きな観光から小さな観光へ、よりパーソナルな観光へ、「長期的視野を持った地域還元型の観光スタイルを支える人づくり」が必要。【古田委員】
- ・安全で安心な観光地が求められる。感染症に強い観光地づくりを。
【岸野委員】

(危機管理)

- ・(危機事案への)「備える」という視点を大きく打ち出すべき。【上手委員】

(コロナ禍の反作用)

- ・リアルでの感情のゆさぶりを求めている。ライブで観たいという欲求を持っている方が多い。文化の中には、リアルに体験したいというものが根付いており、コロナ禍で高まっている【小島委員】
- ・リモート等の取組みを進めていけばいくほど、人間は濃厚な接触をしたがるようになる。【上手委員】

(その他)

- ・新しい日常の先の「ワクワク感」や「前向きな気持ち」を持てるようなキーワードも追加できるとよい。【古田委員】